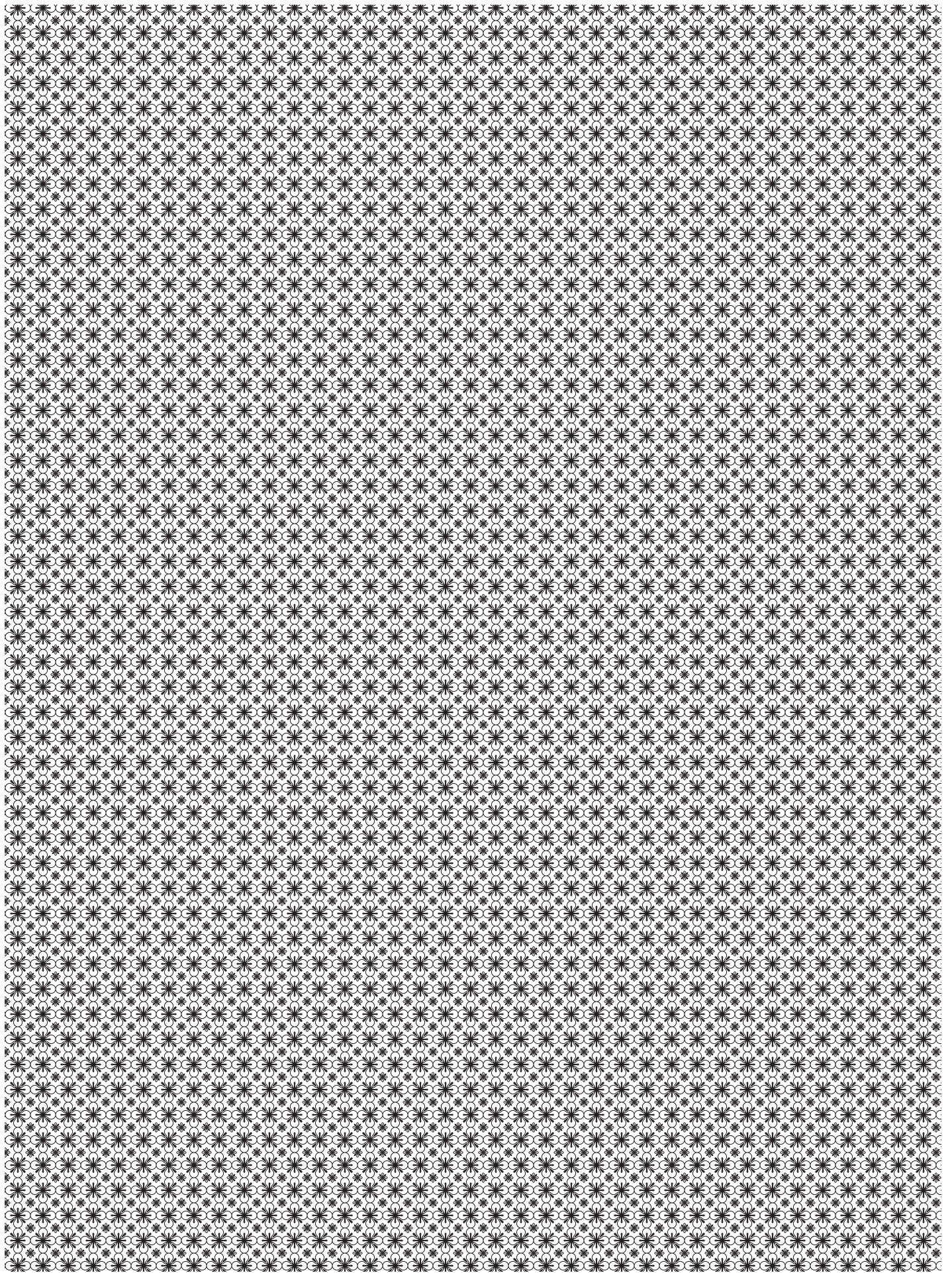


国語



〔問 1〕 例文の傍線部の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 セラピーの世界とは、現代では広範な意味を持つ。

- 1 療法
- 2 睡眠
- 3 分析
- 4 散策
- 5 学問

〔問 2〕 例文の（ ）に当てはまる「四字熟語」として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 違ってはいるようで実は大体同じようなことを、（ ）と言う。

- 1 一心同体
- 2 同工異曲
- 3 一蓮托生
- 4 呉越同舟
- 5 有名無実

〔問 3〕 例文の傍線部の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 彼女の言葉には、教師としての矜持が感じられた。

- 1 名誉を捨てること
- 2 名声に酔うこと
- 3 辛酸をなめること
- 4 誇りをもつこと
- 5 怒りに震えること

〔問 4〕中島敦の作品を、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 『こころ』
- 2 『富嶽百景』
- 3 『羅生門』
- 4 『檸檬』
- 5 『山月記』

〔問 5〕例文の傍線部と同じ漢字を用いるものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 作文をテンサクする。

- 1 打開策をモサクする。
- 2 サクコンの情勢を踏まえる。
- 3 経費をサクゲンする。
- 4 目のサクカクを起こす。
- 5 花粉症タイサクをする。

〔問題〕次の文章を読み、後の〔問 6〕～〔問 10〕に答えなさい。

見取り図の下部の「雨漏りする箇所あり」という特記事項に、茜あかねと晴人はるとはまるで異なる反応を同時にみせた。

「え、それはちよつと」

「へえー」

二人とも、具体的な（ A ）の言葉は続かなかったが、へえーと感心した茜は内心しくじったと思った。間違えた、そこは「それはちよつと」が正しい反応だ。

家の雨漏りは欠陥であり、よくないこと。楽しい、ワクワクする「装置」ではない。

「築年の古い家ですから。でも、修理はきくと思いますよ」軽自動車のハンドルを握る不動産屋の女は後部座席の二人にとりなして、赤信号で停車する。晴人は腕組みをして顔をあげた。もとよりリフォーム前提で検討している物件だったが、雨漏りはさらに費用がかさむ案件だ。

茜の暮らした実家は最近のリフォームまで雨が漏っていた。そう告げると、晴人の眉間に皺が寄る。やはり、雨漏りに対する反応の正解はそつちだった。

「そういえばたしかに去年、お伺いするときに言ってたつけ、『最近まで雨漏りしてたんだ』って」

「うん」

「その『最近』っていつのこと、平成になっても雨漏ってた？」

「うん、漏る漏る……いや、漏った漏った。二年くらい前まで」今度は眉間に皺ではなく、うわあ、と純粋に驚く顔。

「え、あの家って、そんなに古かったつけ」

「いや、だって、晴人が来たときはリフォーム後だから」

晴人を連れて帰省したとき、茜は内心驚いていたのだ。綺麗になった！と。

エンジンのかかる音がして顔を前に向けて、軽自動車青信号になった十字路を直進した。これも「最近」だ。アイドリングストップ機能で、停車が長いとエンジンが自動でストップする。

この世の進化は毎年毎月、たゆまずに行われているだろうが、個々の暮らしはそのようには進まない。毎月リフォームし続けたり、毎年車を買い替えたりはできない。あるときまである技術の中に囲まれて変わらせずに暮らし、あるタイミングでいきなりそのときの最新に切り替えるから、家の内装でも自動車でも、必ず、格段の変化をみせつけられる。

ついさつき、不動産屋の裏手に停められたこの車に乗り込んだとき、晴人も「広いなあ」と呟いたが、あれも過去のそれと比較しないと出てこない感慨だ。

車は大きな通りから住宅街に入り込み、一軒の家の前に寄せて停車した。

「着きました」鍵を受け取り、駐車してくるという女の車を見送り、二人でいきなり中に入らずに家を見上げた。

「なんか……『*』トキワ荘』みたい」

「分かる！」茜は驚いて晴人の顔をみた。同じ固有名詞を思い浮かべていたのだ。アパートではなく一軒家なのに。それに、かつて天才漫画

家が集った有名なアパートの姿を実際にはちゃんと知っているわけでもないのに。

住宅街の中の、昭和っぽい佇まいたなずの家のイメージが二人とも漫画で知ったそれしかなかった。晴人が鍵を差し込み引き戸を動かす。ガラガラガラ。これも「古い」と感じさせる音がしてその奥に暗い玄関と廊下が現れる。ひんやりした玄関に入り込むとき、「トキワ荘」のような不思議な既視感を二人は再び味わった。

「おっと、気を付けて」靴脱ぎからの段差を先に越えた晴人が懇懇に差し出した手を茜はわざとらしい、と笑いながらとる。だいたいの内見を終え玄関に戻ると、遅れてきた不動産屋の女が制服姿のお尻をこちらに向けながら、二人の靴を揃え直していた。

茜は女に、雨漏りする場所を尋ねた。晴人が尋ねなかったのは、雨漏りの有無以前に借りる気がなかったからだろう。茜も茜で気乗りしなかった。間取りが複雑で、思った以上に住みにくそうだ。先に凶らずも露呈した、駐車のにくさもデメリットだ。隣家の塀と敷地間の近さや、ジメジメした気配も気になる。だから、尋ねる必要はなかったのだが。三人で台所まで戻り、女が天井を指さすと染みのようなものがみえる。

ということとは……。晴人と女はずっと天井を見上げていたが、茜だけすぐに視線を床に移した。ということは、このへんに洗面器を置いたか。ビニール樹脂製というのか、ひと昔前によくみたタイプの床の、ここに。

二つ目の物件に向かう車内の後部座席で、茜の頭の中には音が鳴っていた。

雨漏りの音だ。

アルマイトの洗面器を断続的にうつ水滴のテン、テン、という音は、もつと微細に聞くとティン、ティンとかすかに器の中で反響した。ティンとティンの間隔は二十秒に一度くらいだったか。夜通し雨の降り続く中を寝て起きても洗面器が一杯になることはなかった。

雨漏りを父も弟も自分も、どうしていただろう。面白がっていた？

いや、なんとも思ってたなかった、が近い。横着な間に合わせの工夫で、特にストレスを感じることもなく過ごしていた。

うちは貧乏だったという気が、そもそもしない。家は古いが広がったし、車も三度も買い替えた。家族旅行にもよく出かけた。学校で友人と自分のなにか(学用品や服装や弁当の中身など)を比較してみじめに感じることもなかった。感じていたのは、ただただ家がボロいという事実だけだ。でも、そういえば、まるで気にしていないわけでもなかった。

いつか、なにかの付き合いで泥酔した父が居間のソファで寝入った夜遅く、雨が降り出した。自室の十四インチのテレビ画面がカラーバーを映し出し、のびをして勉強部屋から台所に出てきた茜は、しばらく違和感に気付かなかった。冷蔵庫からお茶を出してコップに注ぎ、ソファに倒れる父をみやった。ワイシャツの襟のボタンを外しただけで、だらりと床に下がった手には眼鏡を持ったままだ。

「もう、父さん、風邪ひくよ」口に出しながら、そうやって布団で寝なかったことで本当に風邪をひいた人を別にみたことないな、とも思っても一応近づくことにした。バスタオルを持ってきてかけると父の目が開いた。

その一瞬、父じゃないというか、なんの役割もない生身の生き物みたいな目をした。

「聞こえないだろ」父はそう喋ったあとで、喉のどを鳴らした。痰たんがからんでいたのだろう。

「なにが聞こえないの」

「音が」茜は耳をすませた。ソファの側の窓から雨音がする。

あっとひらめき、慌てて台所に向かうと、洗面器の底に雑巾が敷いてあった。

「気になってさ」振り向くと、父はソファから起き上がって、ネクタイを片手で取り外した。もう生き物じゃない、いつもの父だった。茜は「なるほどね」とかなんとか返事したのだったか。

今にしてみれば、なんの含蓄もない話だ。それでも茜は覚えている。夜遅くまでアルマイトを叩く水と金属の衝突音と、それを気にしていないようで、気にした父。その後リフォームされるまで、同じ工夫は特にされなかったと思う。

「神式なんですか、いいですね」運転席の女が弾んだ声をあげた。

「そうなんですよ」^{III}いつの間にか結婚式の話で晴人はしていたらしい。

二つ目の物件の前で今度は茜が鍵を受け取った。今度の家はトキワ荘みたいではない。小さな玄関で、追い越すように先に^{※2}三和土をあげた晴人が^{うやうや}恭しく手を差し伸べる。

「もう、いいから、それ」

「いやいや」お腹の中に子供がいる実感さえまだ持てないのに、なんでも上辺から、それも芝居がかった形で応じる男。手をとってもらい、茜は晴人の顔をみつめた。

これから生まれてくる自分たちの子供が、この家で暮らす、この玄関で靴を脱ぎ、この段差を何度も越え、なに^{III}こともなく過ごし育ち、不意^{IV}に父親を父でなく生き物のように感じる夜が訪れることを考えながら。

(長嶋 有『雨漏りの音』より)

※1 トキワ荘：東京都豊島区にあったアパートで、手塚治虫、藤子不二雄など、漫画界を代表する漫画家たちが青春時代を過ごした場所。

※2 三和土：土、石灰、にがりを混ぜて叩き固めた土間。

〔問 6〕空欄Aに入る言葉として、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1 前後

2 往来

3 好悪

4 憎悪

5 新旧

〔問 7〕傍線部Ⅰ「内心しくじったと思った」とあるが、そう思ったのはなぜか。理由として、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 今後の生活の中での晴人とのすれ違いを感じたから。
- 2 世間的には晴人の反応の方が正しいと気付いたから。
- 3 雨漏りのする家には絶対に住みたくないから。
- 4 親切な不動産屋に失礼な態度だと感じたから。
- 5 実は雨漏りが好きなことが晴人にばれてしまったから。

〔問 8〕傍線部Ⅱ「しばらく違和感に気付かなかった」とあるが、なぜ「違和感」があったのか。理由として、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 真夜中まで勉強していた疲れが相当たまっていたから。
- 2 ソファにいる父親が見知らぬ生き物のように見えたから。
- 3 すでに雨が降り出していることに気付かなかったから。
- 4 途切れ途切れにうつつ水滴の音が聞こえなかったから。
- 5 夜更けに台所に行くことはほとんどなかったから。

〔問 9〕傍線部Ⅲ「いつの間にか結婚式の話」を晴人はしていたらしい」とあるが、「いつの間にか」という表現から読み取れることの説明として、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 まだ住む家も決まっていなくてもかわらず、結婚式の話をしている晴人に心底あきれられている。
- 2 雨漏りから父親との出来事が想起され、車中でひとり、そのときに思いを巡らせている。
- 3 雨漏りするほど古めかしい家に住んでいたことを思い出し、自分の子供時代のことを恥じている。
- 4 雨漏りに対する反応が自分とは完全に異なった晴人の様子から、今後の結婚生活に不安を感じている。
- 5 自分が雨漏りのことを真剣に考えている間に談笑する晴人と不動産屋の女を、妬ましく思っている。

〔問 10〕傍線部Ⅳ「不意に父親を父でなく生き物のように感じる夜」とはどのようなことか。説明として、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 改めて父親の性格をほとんど理解できていなかったことに気付くこと。
- 2 成長し自我に目覚めるにつれ、父親に対する尊敬の念を失っていくこと。
- 3 父親の、日頃は隠していた粗野な性質に気づき、不快に感じること。
- 4 年頃の娘と男親には、分かり合えない部分があると再確認すること。
- 5 よく知る家族を全く知らない他者のように感じ、距離を意識すること。

〔問題〕次の文章を読み、後の〔問 11〕～〔問 15〕に答えなさい。

誰でもエッフェル塔を知っている。世界中の人が知っていると書いてもよい。どうして知っているのか。子どものときからいろいろな機会に出会ってきたイメージによって、頭の中に植えつけられてしまっているからだ。パリと言えばエッフェル塔、エッフェル塔と言えばパリという連想が、フランスに行ったことのない人の頭の中に染みついてしまっている。知ろうとしなくても、知りたくないと願っても、われわれは否応なしにどこかでそれを覚えこまされてしまうのだ。われわれが映像文化の中に生きているとは、そうしたことなのである。たとえば、フランスで^{※1}ゼネストが長期化しているというニュースがテレビで流されるとき、そこがパリだということを示すために、テレビ局はまずエッフェル塔の映像を映し出す。その上からアコーディオンに乗ったシャンソンがかぶさったりする。これはイメージの教育機能¹と言ってもいいだろう。パリにはエッフェル塔がある、エッフェル塔が見えるからここはパリである——そういう「出来合い（レディ・メイド）」の認識を、われわれは子どもころから心の深層にいわば「刷り込まれて」しまっている。アメリカでもアジアでも、人々はエッフェル塔の映像を眼にすれば、「あ、パリだ」とすぐ納得してしまう。この「誰でも知っている」というのは少々恐ろしいことでもある。つまり、実際にエッフェル塔の「本物」を見たことがない人、エッフェル塔に上ったことがない人間でも、エッフェル塔が出てくると「あ、パリだ」とたちまちわかったような気になってしまう。（中略）

では、イメージとしてのエッフェル塔ではなくて、現実のエッフェル塔とは、いったいどういうものだったのか。エッフェル塔は一八八九年のパリ万国博覧会に際して建造されたものである。フランスの国威発揚のため、フランス文化の威信を世界に向かって示すためのモニュメント（記念建造物）として建てられたわけだ。それは進歩と産業の記念碑でもあったし、またごく単純に客寄せのためのアトラクション装置でもあった。一八八九年以後、今日に至るまでほぼ一世紀の時間が流れているが、この百年の間にエッフェル塔は、パリのセーヌ河畔の^{※2}シャン・ド・マルスにそそり立つ現実のオブジェというよりはむしろ、パリを表象する紋切型のイメージとして全世界に流通するようになっていった。いわばエッフェル塔は百年間かかってモノからイメージへと変わっていったわけだ。（中略）

「イメージ」とは、現実そのものではなく、現実似せた仮の「似姿」でしかない。いわば徹底的に「空虚」なものなのだ。テレビ画面に映る映像も実は「空虚」であり、そこにはただ単に、光と影の戯れが映し出されているだけだ。そこには現実はなく、空っぽで重さを欠いた映像が、光と影の移ろいとして揺れているだけである。しかし、われわれはそれを通じて現実の体験に参加しているかのような印象を受ける。徹底的に空っぽなものを通じて、充実した実体験のなまましい錯覚が生じる——映像文化の時代の複製映像はそういう形で存在しているわけだが、エッフェル塔というこのすかすかの空虚なオブジェは、言ってみればこうした「イメージ」のありようをそっくりそのまま映し出している最高の比喩形象なのではないだろうか。

映像文化の時代の申し子としてのエッフェル塔が、百年間にわたって、ものからイメージへ、さらに記号へ、とだんだんと変化を遂げていく。われわれはパリに現実存在している実際のエッフェル塔の実物ではなくて、「空虚」な記号と化してしまったエッフェル塔に慣らされてしまっている。パリと言えどエッフェル塔、エッフェル塔と言えどパリ、といった自動的な条件反射がわれわれの軀^{からだ}に染みついてしまっている。ここからは、いわば実際のエッフェル塔が——「エッフェル塔それ自体」が消えてしまっているのだ。実体が消え、記号やイメージだけが流通し交

換されてゆくというコミュニケーションの形態が、今日の情報社会では支配的なものになってきている。

エッフェル塔はたいへん美しいものだ。われわれは観光絵葉書のような「イメージとしてのエッフェル塔」に慣らされすぎていたので、実際にパリに行ってもああエッフェル塔があるなということ、特にその姿をじっと見てやろうという気にならない。美術館に陳列された絵画のよくな高尚な芸術なら、まじまじと見つめてその美しさを味わおうとするだろうが、エッフェル塔というのは今や「空虚」な記号と化してしまっている。われわれにとって、その「実物」と正面から出会うとする気持ちになりにくい。これは危険なことではないだろうか。つまり、「イメージ」だけが行き交う空間に慣れすぎてしまうと、現実のまま美しい手ごたえに対する感性が鈍くなってゆく危険があるのだ。優美に彎曲わんきよくしてゆくエッフェル塔の稜線はたいへん美しいものであるが、映像文化の中にどっぷりと身を浸していると、ものの見方や認識の仕方が条件反射の連想ゲームのように短絡したものになってゆく。われわれは知らず知らずのうちに、現実そのものとちゃんと出会えないという「病」に罹かかってしまっているのではないだろうか。

では、どうしたらいいのか。生き生きした現実の手ごたえを忘れてはならない——これはもちろん、いくら強調してもしすぎることはない点である。映像文化というのは^{※3}先ほどから述べているような版画、写真、映画、テレビというところからさらに進んで、今日ではコンピューター・グラフィックス（CG）のようなものも出現している。CGは0と1からなるデジタル言語のプログラムによって作り上げられた映像だから、同じプログラムが作動しさえすれば寸分違わぬ画像がいくらでも再現・反復可能である。まったく同一のものが、情報にノイズが生じることなく限りなく再現・反復されてゆき、その過程でいかなる劣化も生じることがない。今日、コンピュータ・ゲームの中にはまりこんで遊んでいる子供たちは、原っぱで転げ回って風を額に受けたり、木々の香りを胸いっぱい吸いこんだりといった体験なしに、二次元のテレビ画面の中の映像とだけコミュニケーションを交わすといった形で子供時代を過ごしてゆく。友達と喧嘩して軀と軀がぶつかりあうといった手ごたえのある体験を知らずに大人になってゆく。テレビ画面の中でちらちら動いている、0と1の機械語のプログラムで構成された映像とだけ遊んでいる子供たち——これはある意味でとても不幸だし、危険なことでもあろう。

映像文化は、行き着くところまで行くと、映像だけが現実だということになっていく。映像—対—現実という対立関係ではなくて、映像こそ現実的であり、なまなましい、現実的なのは映像だけだということにさえなってしまう。こういう時代のただなかで、われわれはどのように生きていったらいいのか。^{※4}ファミコンで遊んでばかりいないで、もつと外に出なさい、野原で遊んできなさいと言いたくても、そもそも今日の都市環境では野原で遊ぶなどというのは途方もない贅ぜいたく沢になりつつある。また一方で、「オリジナルへ戻れ！」といった考え方に、ある種反動的なところがあることも否定できない。つまり、われわれはもはや映像文化の中にどっぷりと浸り込んでいるのであり、オリジナルがただ一点あるだけだった前近代へ戻れと言っても、なかなかそういうわけにはいかない。

もう一つの途みちは、単にイメージを捨てて現実へ戻れというのではなく、イメージに取り囲まれながら、イメージそのものただなかで、空虚ならざる映像のありかたを何とか探つてゆくという選択だろう。ヴァルター・ベンヤミンというドイツの思想家がいるが、彼は「複製技術時代の映像はアウラを消失した」と言っている。キリスト教の^{※5}アイコンでもいいし、仏教のお釈迦様の絵でもいいが、聖なる存在の頭の周りには光の輪が描かれるのがふつうだ。光輪というか光背というか、とにかくこの聖なる光、これをアウラと言う。われわれにとって貴重なものは、われわれにとってのいわばアウラを帯びて立ち現われてくる。恋人の顔でもいい、感動的なまでに美しい風景でもいい、失恋の直後に見た夕焼け

の海でもいい。何でもいいが、自分にとってかけがえなく貴重な何かというのは必ずアウラを身にまとっている。ところが、映像文化の時代に入つて、イメージがいくらでも反復可能・再現可能になってくると、「映像からアウラが失われてゆく」ことになる。

ベンヤミンは、「ある晴れた午後、地平線を限る山並みや影を投げかける枝を見つめていると、そこに永遠が立ち現れてくる」と書いている。美しい文章であるが、こうしたかけがえのない体験、特権的な出来事が誰にもあるだろう。そういうとき、われわれの眼にはアウラの輝きが映っているのだ。ところが、複製技術が発達して、いくらでもイメージの繰り返しが可能になる、こうした貴重で特権的な瞬間からアウラが失われていく。今日、子供の運動会の映像を親たちは競い合うようにビデオ・カメラに収めている。ビデオ映像は何度でも再生可能だから、テープを機械にかけさえすれば同じ映像がいくらでも再現できる。すると自分が体験したあの一瞬のかけがえなさは、その決定的な魅惑は、薄れてゆくほかない。アウラの消失とはそうしたことだ。

このアウラの消失が、二十世紀の映像文化の大きな特徴であることは間違いない。大量の映像がすぐ手の届くところに存在し、おびただしく行き交っている。われわれは今日、月の裏側の写真も、美しい女性のヌード写真も、何でも手軽に所有することができる。幼年期の思い出もビデオに記録されているから、モニター画面の中でいくらでも再生し、反復し、いつでも自由に見直すことができる。映像の氾濫——そのことの便利さ、豊かさもあるが、その反面、ある一回限りの貴重な映像の輝きが失われてゆくことにもなる。アウラの輝きに対する繊細な感性を、われわれは決して忘れるべきではない。写真もビデオもいよいよ簡単に撮れるようになってゆくし、安価な雑誌ジャーナリズムにはありとあらゆる映像が満ち溢れている。またテレビの衛星放送を通じて、地球の裏側で開催されているサッカーのワールド・カップの試合なども、リアルタイムで簡単に見ることができ。しかし、こうした簡便さ、量的な拡大、映像の伝達の効率性と引きかえに、「イメージ」が本来帯びているはずの輝きを、われわれの瞳が取り逃がしやすくなっていることもまた事実である。そうした輝きに感応しうる繊細なまなざしを失わずに、また映像の氾濫の中で量に流されずに、豊かなイメージと貧しいイメージとを選び分ける感受性を鋭く研ぎ澄ましてゆくことが、これからはますます必要になってくるはずだ。

(松浦寿輝「映像文化の変貌」より(吉川弘之『文化としての20世紀』所収)

- ※1 ゼネスト：ゼネラルストライキの略語。特定の企業や組織単位ではなく、全国規模で労働者が一斉にストライキを行うこと。
- ※2 シャン・ド・マルス：フランス・パリにあるシャン・ド・マルス公園。公園の北西側にはエッフェル塔がある。
- ※3 先ほどから述べているような：この文章の前の部分で筆者は、版画、写真、映画、テレビといった映像文化についても触れている。
- ※4 ファミコン：任天堂より一九八三年に発売された家庭用ゲーム機。
- ※5 イコン：聖人、天使、聖書における出来事やたとえ話などを描いた画像のこと。

〔問 11〕傍線部Ⅰ「イメージの教育機能」の説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 ここにない、あるものを指し示すために、平易なイメージを用いること。
- 2 あるものを打ち解けやすく指し示すために、イメージに加えて音楽を用いること。
- 3 あるものの現物を知らない人に、現物の代わりにイメージを用いて教えること。
- 4 あるイメージだけが、子供の頃から心の奥底に擦り込まれていること。
- 5 ある報道の社会的な重大さを、イメージの力により、猛烈に印象づけること。

〔問 12〕傍線部Ⅱ「この『誰でも知っている』というのは少々恐ろしいことでもある」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 心の深層において誰もが安らいだ気になってしまうから。
- 2 紋切型の宗教が知らず知らずのうちに世界に広まっているから。
- 3 自分の認識が自分の意志や体験を無視して作られていくから。
- 4 世界中の人々が誰でも仲間だという意識になってしまうから。
- 5 言語の違いを無視して誰でも知った気になってしまうから。

〔問 13〕傍線部Ⅲ「複製技術」の説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

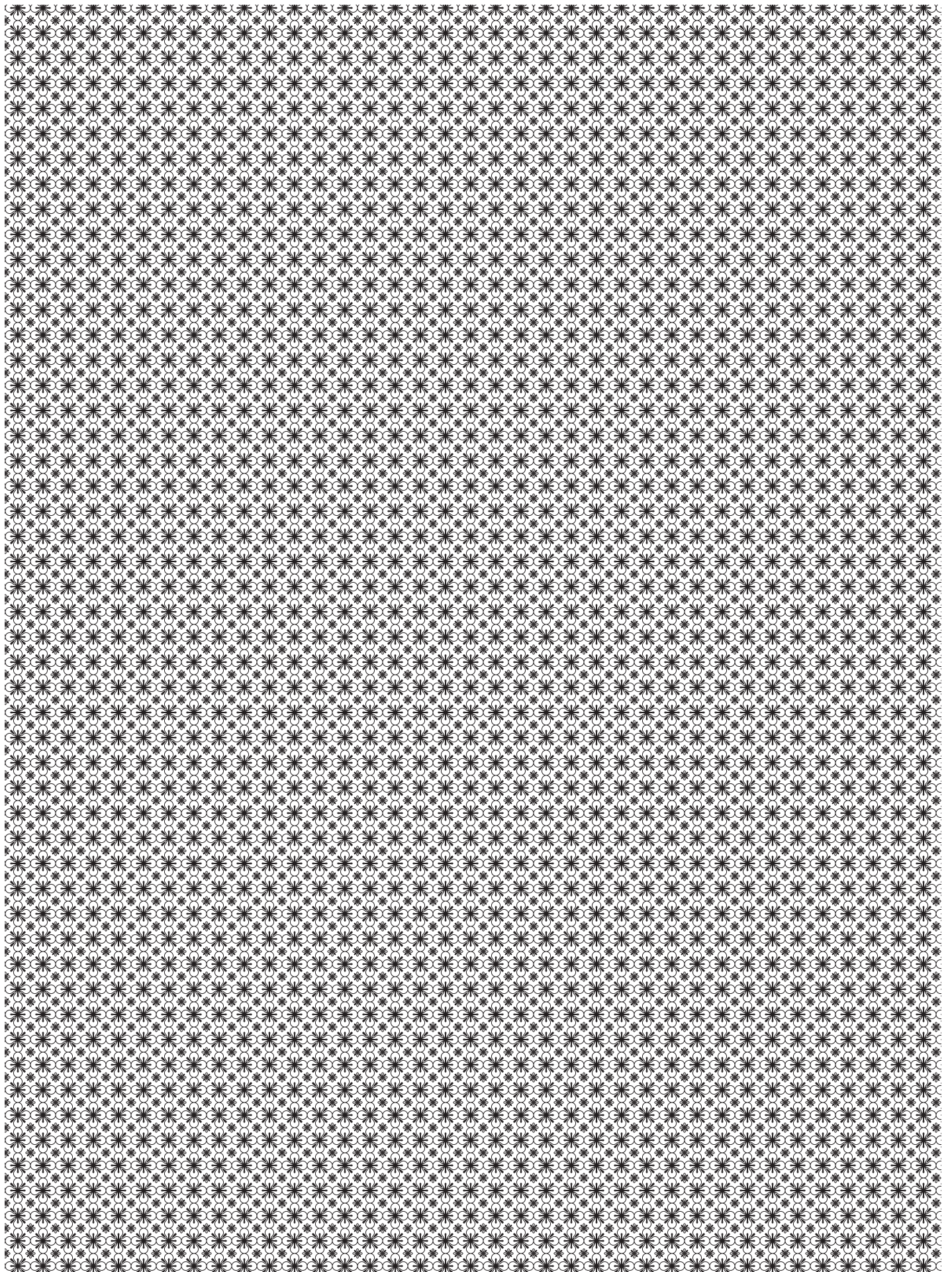
- 1 「0か1か」の電気信号によって画像を構成していく技術。
- 2 何枚も何枚も同じ絵を刷ることが可能な版面のような技術。
- 3 コピーではなく、まるでコピーのような実物を享受する技術。
- 4 ゲームやビデオのように、イメージを脳裏に刷り込む技術。
- 5 電波によって、ヨーロッパと日本のような遠方を結ぶ技術。

〔問 14〕本文の論の進め方の説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 まず具体例を取り上げ、そこから具体的な問題と二つの解答を導き、それらを一般化して示している。
- 2 まず問題を示し、それに対する解答を提起し、それを証明するための四つの具体例を取り上げている。
- 3 まず解答を示し、それに対する新たな問題を提起し、それらを発展させる具体例を示している。
- 4 まず具体例を取り上げ、そこから一般的な問題を導き出し、それに対する解答を提起している。
- 5 まず問題を示し、それを説明するための具体例を取り上げ、それに対する三つの解答を提起している。

〔問 15〕本文の趣旨に合う説明として適切ではないものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 映像文化を完全に否定するのではなく、映像の氾濫を前提としてそれとの付き合い方を模索するべきである。
- 2 エッフェル塔は、映像文化の時代におけるイメージのありようをそのまま映し出した比喻形象である。
- 3 アウラの消失は、写真、映画、テレビ、CGといった、二十世紀の映像文化の大きな特徴である。
- 4 イメージだけが行き交う空間に慣れすぎてしまうと、現実そのものときちんと出会えなくなる危険がある。
- 5 イメージを捨ててオリジナルな現実に戻ることは、映像文化の時代においても成すべき課題である。



令和8年度労災看護専門学校入学試験正解表

教	科	国語
---	---	----

問	正答番号
1	1
2	2
3	4
4	5
5	3
6	3
7	2
8	4
9	2
10	5
11	1
12	3
13	2
14	4
15	5